

入院生活における患児の楽しみに関する分析 - 6歳以上の学童期、思春期に焦点を当てて

2階東病棟

○ 松井美由紀 吉野 真理 矢野 和代 松尾 広美
 平山由利子 水間美智子

I. はじめに

私達は入院中の患児に限られた生活の中で、テレビゲームやビデオ、他の患児とのコミュニケーション、家族の面会、病棟行事などで目を輝かせ楽しんでいる姿を見かける。しかしこれは看護者の客観的な見方である。土井によると、「看護者は子供のストレスを低下させ、できる限り楽しく入院生活を過ごすことができるよう子供に働きかける役割をになっている」¹⁾ と言っている。これまで入院中の遊びやQOL、ストレスなどについての研究は多く行われているが、主観的な楽しみについての研究は少なく、実際の患児の楽しみを明らかにしたものはない。これらのことから、学童期、思春期の患児が入院生活の中で何を楽しみとしているのかを明らかにし、看護援助につなげることで、生活の質の向上、入院中の苦痛・ストレスの緩和、不安の軽減、成長発達の促しに役立つのではないかと考えた。

表1 対象者の背景

II. 研究方法

1. 対象者 (表1)

1ヶ月以上入院している6歳以上の学童期、思春期の患児6名。

2. 調査期間

平成11年7月から9月まで

3. データ収集方法

研究者らが独自に作成した半構成のインタビューガイドを用いて、30分から40分面接を行った。

4. 倫理的配慮

面接施行時は家族、患児の了解をとり、個室で看護婦一人、患児一人で行った。

5. データ分析方法

面接内容をKJ法で整理し分析した。

6. 言葉の定義

「楽しみ」とは、喜びや嬉しさなど快の感情からくる行動全てのことと定義した。

	年齢	性別	疾患名	入院期間	その他
A	6	F	ウロリンジボアマン病	H06.1.27~現在	人工呼吸器装着
B	8	M	急性汎血性白血球減少症	H11.6.14~現在 (3回目入院)	逆隔離
C	12	F	化膿性脊椎炎	H11.5.17~7.29	
D	14	M	慢性活動性EBウイルス感染症	H11.4.15~9.09	
E	14	F	左真珠腫再発	H11.8.02~9.30	筋ゾストロフィー 人工呼吸器装着・夜間 車椅子移動
F	15	M	肝細胞癌	H11.3.23~現在 (6回目入院)	MRSAにて隔離

III. 結果

表2 楽しみ分類

1. 楽しみについて (表2)

8つのカテゴリーに分類できた。その内訳は遊び・コミュニケーション・清潔・睡眠・環境の変化・病棟行事・病状に関する感情・学習であった。

2. 入院中の患児の過ごし方

ビーズ、折り紙、プロミスリング、シャボン玉、他の患児と遊ぶ、学生と遊ぶ、散歩、売店に行く、マンガ、読書、ビデオ、テレビ、テレビゲーム、音楽を聴く、勉強、宿題、寝る、ボーとする、でれーっとするなどがあつた。

3. 分校の授業について

「えい」、「悪い」、「難しい」、「いや」、「楽しくない」、「最初はできんでいいと思っていたが不安になり、分

遊び	ゲーム、テレビドラマを見る、パソコン、マンガを読む、騒ぐ、風船で遊ぶ、おもちゃで遊ぶ、何かを作る、付録を作る、他の患児と遊ぶ、ゲームやマンガが発売された時
コミュニケーション	電話、初めての会話、面会
清潔	シャンプー
睡眠	寝る
環境の変化	外泊、売店に行く、体が動かせるようになり好きなものが取れる
病棟行事	ひな祭り・子供の日・節分・花火・七夕・誕生日のお祝い やプレゼント、クリスマス会等
病状に関する感情	注射がない日
学習	あさがおが大きくなった日

校にはいり勉強しだしたらいやになった。」「行きたくない」という意見に分かれた。その中の楽しみは、絵本を読んでもらう、生活の時間（散歩）、国語の時間、「楽しくない」、と言う意見があった。

4. 面会について

「ありがたい」、「嬉しい」、「楽しみとは思わん」、「別に」、「何も思わない」、「来てくれるだけでいい」などがあり、誰が来てくれるのが一番うれしいかには、兄弟、姉妹、両親、友達、いどこ、学校の先生などがあった。

5. 今後してみたい楽しみについて

泳ぎたい、ピンクレディーみたいに踊りたい、外泊、サックスを吹きたい、海に行つて泳ぎたい、退院、お兄ちゃん達と遊ぶ（ゲーム、鬼ごっこなど）、おいしいものを食べたい、走りたい、動き回りたい、ダイエットしたい、友達と会いたい、学校に行きたい、高校に行きたいなどがあった。

IV. 考察

今回の調査において、入院中の患児の楽しみはテレビ、テレビゲーム、マンガなどの遊びや家族の面会、分校の授業、外泊の決定など様々であった。全体的には一人で行えるものが多く、他の患児との交流を通して行うものは少なかった。これは室内隔離や点滴、原疾患からくる運動制限など、何らかの行動制限があるためと考える。また当病棟では年齢層が幅広く、同年齢の患児が少ないため一人で行う楽しみとなっている。しかしそれぞれの患児なりに入院生活に楽しみを見い出していた。ピアジェの認知発達理論によると、今回の対象となった患児は具体的操作期と形式的知能操作期にあたる。この時期は具体的に物事を理解でき、理論的に思考したり推理できるようになるため、入院生活を現実的に受け入れ対処していると言える。

また楽しみは同じ内容で毎日繰り返されていた。今回の研究において日常生活行動についても調査したが、同様の結果が得られた。土井は、「入院中の子どもでは健康な子どもよりも新しい事を経験する機会が少なく、生活が単調になりやすい」¹⁾ と言っており、楽しみも日常生活行動も変化が乏しく、毎日繰り返されていると考える。現在病棟では季節にちなんだ病棟行事を行っているが、隔離などで参加できない患児もいる。今回病棟行事を楽しみと答えている患児もおり、行動制限に関わりなく楽しめるようなものを今後は考えていく必要がある。

次に年齢から見ると、高くなるにつれ入院生活の中の楽しみが少ないという結果が出た。1つには先に述べたが、当病棟では同年齢の子どもが少ないことが影響していると考えられる。その他に益守は、「学童後期の集団は、両親や教師の介入を避け、結束の固い行動集団を形成しリーダーの下に相互に密接な関係を示すことを特色としている。」²⁾ と言っており、入院前の友人関係を大事にしているため病院内での交友関係を作りやすく、楽しみの幅を広げにくいのではないだろうか。今回の調査において楽しみの中で遊びの占める割合は多く、遊びを楽しみとしてとらえていた。しかしそれらの遊びには看護婦が関わっているものは少なかった。広末は、「遊びは不安への対処、非言語的コミュニケーション、自分自身で癒す過程の獲得など様々な機能があり、特々な体験に対処するために必要不可欠なもの」³⁾ と言っており、このことから遊びから楽しみを引き出せるように看護婦が積極的に介入していく必要がある。

病棟では分校の授業が行われている。入院中の学習活動は、入院や治療による学習活動の中断・遅れなどを克服する手段であるとともに、友人を作ったり医療者以外と関わるなど入院生活に変化を与える場となっている。このことから私達は分校の授業を楽しみのひとつと考えていたが、今回の研究結果においてはこれを楽しみと捉えている患児と、楽しみと捉えていない患児がいた。楽しみと答えた患児は、入院中に分校に入学し分校での授業が初めての学習の場であり、入院生活に変化ができて楽しみとなっていたのではないだろうか。逆に楽しみと捉えていない患児は、入院前に学校に通っていた事があり集団学習に慣れているため、隔離などで制限されたりあるいは同年齢の患児がいないことや、先生と一対一で行われる分校の授業は楽しみとなっていないのではないだろうか。

私達は、面会が入院している患児にとって最も刺激的で楽しい時間であると考えていた。これまでの研究でも同様の結果が得られており、面会は家族や友人など社会とのつながりを持たせる場であり、重要な意義があると言われている。しかし今回の結果では面会を楽しみとしている患児は少なかった。これは当病棟では、化学療法中の患児や感染症など様々な疾患をもつ患児がおり、面会については時間や面会者、面会場所などに厳

しい制限があること、また一番身近な存在である母親などが付き添っていること、さらに入院中の患児の中には遠方から来ている者もあり、面会を諦め、楽しみと捉えていなかったと考えられる。

患児が今後してみたい楽しみについては、制限されている入院生活の中では果たせにくいものや、入院前に経験した事のあるものであった。これらの楽しみが果たせないことは患児にとって切実な問題ではないだろうか。今後は入院生活の中でそれらの楽しみが少しでも果たせるように考えていく必要がある。

V. おわりに

今回、学童期・思春期の患児が入院生活の中で、様々な事を楽しみとしている事が明らかとなった。またその楽しみは変化なく毎日繰り返されていたことや、達成しにくい楽しみを持っていることがわかった。今回の結果をもとに、看護者は制限の多い入院生活の中で患児が楽しみとしている事を把握し、それぞれにあった環境を提供し、入院中の苦痛やストレスの緩和、成長発達の促しにつなげていけるよう援助していく必要があると考える。

引用・参考文献

- 1) 土井まつこ：入院中の日常生活への援助，小児看護，21 (10)，1328 - 1332，1998.
- 2) 益守かづき：障害をもった子どもたちの体験してきたことに対する思い，これからの小児看護，南江堂 59 - 70，1998.
- 3) 広末ゆか：入院中の遊びの必要性，小児看護，22 (4)，430 - 433，1999.
- 4) 牧洋子 井上恵美子 阿部智美：医療者の遊びへのかかわり，小児看護，22 (4)，434 - 439，1999.
- 5) 秋葉英則：小児期における遊びの意義，小児看護，22 (4)，426 - 429，1999.
- 6) 横山京子・舟島なをみ：長期療養児の成長・発達への援助，小児看護，21 (10)，1316 - 1321，1998.
- 7) 本間照子：QOL とナースの役割；とくに成長・発達の視点から，小児看護，20 (5)，582 - 584，1997.
- 8) 片田範子：子どものQOLと子どもの権利，小児看護，20 (5)，651 - 654，1997.
- 9) 北島靖子 小野敏子：小児病棟における「遊び」に関する実態調査 - 自由記載項目の検討 - 順天堂医療短期大学紀要 8，89 - 98，1997.
- 10) 古川ゆう：学童後期・思春期患児の捉える長期入院生活，第28回日本看護学会集録（小児看護），8 - 10，1997.
- 11) 中村伸枝他：慢性疾患患児のストレス，小児保健研究，55 (1)，55 - 60，1996.
- 12) 無籐隆：子どもの発達と遊び，小児看護，18 (1)，85 - 91，1995.
- 13) 北林外美栄他：組織的な遊びを介して得た遊びの効果 - 室内安静を強いられる児への働きかけ -，第26回日本看護学会集録（小児看護），139 - 141，1995.